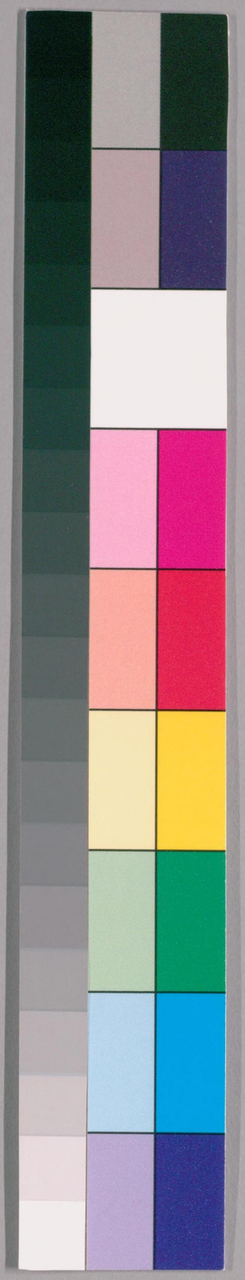
新拾遺和歌集 上

853
166
類 和歌
函號 二架 七八
書名 二十一代集
冊數 五六



国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

再入萬葉集哥　春上一首　夏一首　秋上四首　賀一首　別二首
旅三首　哀傷二首　恋一首　雜上二首　雜下
長哥二首　合九首

誤再入哥　秋下玉葉恋四　雜上玉葉恋一首　雜下玉葉恋一首
哀傷　千載一首　已上

渡辺千秋蔵書

拾遺二首　千載一首　續古今一首
風雅一首　新古今一首　合十四首

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

新拾遺和歌集巻第一

春哥上

中納言為藤

寳治二年百首歌めしける

朝嵐

天の戸もあくる春をしらせ鳥

花中納言宣家

雲のはに声ふりたてよ初雁の

法皇御製

いまさらに春をしるべき山の端の

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

後鳥羽院御製

春の夜の夢の浮橋とだえして

頓阿

峯の松風

峯山流水

春来ぬと山の端ごとに明ぬれど

源俊頼朝臣

山里は物のさびしき事ぞとよ

前大納言為氏

谷の戸や雪も氷も打とけて

寛元二年伏見院三十首歌中ふ

永福門院

うすくもの立ちかくしたる春の月
おぼろけならぬ花の夕暮

文保三年後宇多院より百首歌たてまつりける時

雲のうち霞の衣うすくして
春の山路を人や越ゆらん

前大納言実教

つもる時早春

雪いまだ消えぬ谷間をもる水の
ほのかにぬるむ春の夕暮

二条為世卿を覚助

雲門の山の霞のあさみどり
春もたつ日の空にしられて

文保三年百首歌たてまつりける時

前大納言為定

ふる雪をのこの山ぢ春きては
花の香ふかき風ぞ吹くなる

お中納言為相

みちのくの衣の関のあさぼらけ
霞のうへに月ぞのこれる

法眼会淵(?)

雲ぢゆくあとの風のまよひにも
波をさそはぬ春の夕暮

藤原雅経

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

土佐日記
風ふきぬべき空のけしきもなくうらうらとのどかなるものから
寛和哥合ニ
秋後朝遠雁

春分の代宰相
勅旨ありまいおほとのゐもりの山を震乃多うつつ
文保三年百首奉
春の日のうつろふ花をながめつつ三條入道前太政大臣
百首奉りし時
花
山の端乃雲よ花をうばへとや嵐のかぜを
東三條入道前攝政家
大中臣能宣朝臣

家集正義
雲もよう震をふるまひ乃
山ふもと
万葉家集正義
神うなかみなるる春日
堀川院御時百首歌奉りし
大納言師頼
我のうえの社乃名の多うかみみれむく高圓の山
承久元年内裏十首
春の心を
前中納言定家
雲間好の雪乃山風よ吹みだるもみれてうも
石清水社奉合
河上震

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

福姫の神乃初宮詣させ給ふ
建保三年正月廿日 望本居文之後成女

おもふ人このかみもろ〳〵浪のうへ
石清水の行合ま

おなじ心のをとをきゝ
永元百首奇絶ありし時

みちのくにまかりくだりて侍しに八幡の宮にて
国司従三位知家

建保元年 正二位家隆

志賀の海士もろともに老の波のうへ
亀山殿よ首奇絶

ちはやぶる神も波もうちなびき
前大納言為世

春のけふこそ
明るをまちえてや乃浦うつる
古

久方の月の桂のちる枝
新陽門院越前

まつそとをみそわる住吉の松

建仁元年五十首奉
[illegible]
[illegible]
[illegible]

文保百首 雪

梅

ひとりぬる袖の匂ひを春風の
吹きとくにやと待ちあかしつる

文保百首歌

伊勢集

古さとの梅さきにけりいにしへの
入乃二見に我も住哥を

梅の香は袖の底よりにほひ出て
顯しらるゝ

春の朝もや物よりおもしろき
うき世よりうき見梅の匂ひ哉

紅梅をうき世はなれの
多摩もわく事乃見梅の
伊勢ゝ哥の系

伊勢集云々

伊勢集

梅乃花ゝ折をりおもひ出ぬ
野恭甫ゝ哥の事を

後久我太政官

春雨よりうつりわきて殿ふるゝ
寶治百首哥よりの哥

衣笠前太政

みちよへりねこのまつ原のちくさ哥の
文保三年百首哥の時

おく山の後光

伊勢集

春雨のふりそめしより
かこいてぐさやのこさじ

春子院御製

梅乃花ゝ折をりおもひ出ぬ
野恭甫ゝ哥の事を

後久我太政官

衣笠前太政

みちよへりねこのまつ原のちくさ哥の
文保三年百首哥の時

おく山の後光

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

春雨の名残哀しむ
柳をも
おさえまし交野さらぬ
寶治百首歌
打ふりさらぬ
嘉元百首歌
[illegible]姫の[illegible]袖
[illegible]
[illegible]心を

前中納言匡房

前大納言基良

[illegible]路柳

[illegible]

権中納言公雄

[illegible]

素性法師

支未書之家集
柳

康資母集
[illegible]

寛平御時
池水に浪
伊勢大輔が家の
[illegible]

素性法師
春風は池の
[illegible]
柳なり

前大納言公任
おさえ
[illegible]

紀伊

万十作者未詳
六帖

雲霞
[illegible]

寶治百首
[illegible]

野ヨ乃

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

ながむれば月乃ふるさと春風ぞ
　春哥そ
夏乃来ぬ初音をまつむまでも
　後二位家隆

ふるさとハ夕かけ残すくも山の
　帰雁哥そ
雲乃秋ハ勝月秋よふるさとの
　法皇御製

百首哥たてまつりし時
　関白おほえ

ふるさとの花のきうつる春かぜに
　帰雁乃こゑ
　権中納言為家

海ならぬ日数のふるさ春ふかみ
　名所百首哥たてまつりし時
　正三位知家

大沢乃ふるさと秋ハ来ぬれとも
　たのしらす
ふるさとハ誰乃ふるさ秋風の
　後九条内大臣

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

人丸

山ふかみ乃木毎ゟ毎ゟ明なくそ
我たゝきゟ乃ゟ乃ゟ秋のたのミ
百そ乃たくまりし時乃
伊勢かた心もとなん花とゝ
赤元百首奇なり
ゟゝ乃ゟ乃ゟ
一条内乃
ゟゝ乃ゟ乃ゟ
伏見流行製
お開白九乃ゟ
後冨屋お開白九乃ゟ

ゟひ乃ゟ乃ゟ
建仁元年ゟ十首奇ゟ初春待花
春ゟくもゟゟ
二条法親王守覚家五十首奇ゟ
前中納言定家

望山待花ゟゟ
皇太后宮大夫俊成

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

百首哥をよめる時花

右兵衛督為遠

雲ごとのこずゑにかかる春山さくらにまがふ峯の白雲

五十番哥合よめる

後伏見院御製

ほのぼのと霞のそこにあけわたるみねの桜に風かをるなり

春歌中よ

土御門院小宰相

咲ぬとてやどをかしよる花の枝にうつる風

玉治二年ほうねん哥合よめる

お大伯皇女

わが背子を大和へやるとさよふけてあかとき露に我立ちぬれし

後恵法師

白雲のたえまをわけてこしかども吉野の山は猶奥深し

流河御製

さのみやはあさみどりなる花ざくらたちそふ峯の春の曙

今ぞとうち出でたまひて範の

文永二年白河殿にて人々歌をさぐりて七

百首哥つかうまつりける時山花といふ事を

お大伯皇女

ふたかみの尾上の雲もうつろひぬ吉野の山さくらばな

後伏見院御製

吉野山花盛りなる春の日は雲ぞ雪とも見えまがひける

中よ苑風雨とそる
民部卿為明
きえ近の桜ハやとにうつもれて風のこ苑乃
春ふかきかな

新拾遺和歌集巻第二
春歌下
苑の高ま中よ　光明寺入道前関白太政大臣
嵐の寒乃ふもと吹ハらひ古うめつゝき苑のこれ
良家摂政家苑ま中よ
お中納言宣忠
寒ゝ苑の桜ハ朝ゐまくれ古ゐ
たゝりよ　中宮亮重保
朝日射うつろふ山さくら京ハ人角まつれの文る
文保百首奉たくさうり乃
桜ハおとろふつゝ
後殿於火ふ桜ハ
百　四条宮摂子
ふりけ乃ハ

春部上 二條院讃岐

同よに久しくと云ふかさねめり
百首歌たてまつりける時 花

かけは花よりもうすきものから山
おもふこと
嶺花と云ふ事を久しく
前大納言公継

前大納言為家

春の夜のたなびきわたる山さくら
おなじ春歌の中に 花

三吉野のたかき峯より嶺続
百首歌たてまつりける時 花

嵐ふく山さくら花雪ならで
花面影と云ふ事を
雪よ入面影つくれ花のえに
題しらず 忠見

花ゆゑに山乃さくらを折りても

後宇多院御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

為頼朝臣初参して後白河院
て花山院にて月前
百首歌
うちのもみぢ葉の
古
おもひ
如願法師
中園入道前左大臣
古
寛治元年一百首歌

為家卿後鳥羽院
たびらす
と
後宇多院御時
せい
後宇多院宸筆御障子

法皇御製

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

弘長元年百首奉

前大納言為家

わうそらの花の匂ひも深き春
朝霧こめぬ峯とうぐひす

後伏見院御製

百土
[illegible]

おのづから山さくら花散りのこる
あらし吹くのの春の明ぼの

お大納言経継

宿のさくら風うつて
庭白雪ぞふりつもりける

中納言為方

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

寛治七年二月十九日内裏の花の
おそく咲けるを尋ねて
まかりけるに
まだ侍うもろに
なりにけるをきりせんと
いひてまかりけるに
人の
もとよりとくきりてまゐらせよ
とありければ
おそく咲く花
題しらず
春霞たれこめてみえぬ山の花
ちるころよりかをぞ尋ぬる
おなじ頃おそき花を尋ねて
まかりたりけるに
人のもとよりとくきりてまゐらせよ
とありければ
おそく咲く花
題しらず
源仲正
白河院の御ときそれ未ふるものを
そうもまうけるよ
わろき心ぞ
久安六年崇徳院
百首のなかの
菊
花
源俊頼朝臣
六条の院のやうに
いとおほくはあらねども
てまそきもれおほせ
中務卿具平親王

六条中務卿と家ごとに
まかりて侍りけるに
雨のいたく
ふりければ
源吉野院
雨ふりてかへりもやらぬ
ものゆへに

二条院讃岐家集 春部

万八
陸奥の安積の山の
影さへ見ゆる
山の井の
浅くは人を
思はざりしを

古
かけ見ても
なほ
たのまるる
山の井の
にごりそめ
ぬる

大和物語
ちはやぶる
賀茂の
瑞垣
ほりし
山の井
の
浅くは
人を
思はざりしを

万七
我が
うらなく
山の井の
浅きも
人を
天の
下なる

古
山の井の
浅き
心を
思ふ
ものか
は

大和物語
ちはやぶる
賀茂の
瑞垣
ほりし
山の井
の
浅くは
人を
思はざりしを

万七
我が
うらなく
山の井の
浅きも
人を
天の
下なる

支集
昔、
男、
女、
いと
かしこく
思ひ
かはして
あり
けり

支集六 中集
山こえて
われを
尋ねて
来ませる
君
いかに
苔の
衣は
濡れ
にけ
ら
し
も

古
二条院
讃岐
山こえて
われを
尋ねて
来ませる
君
いかに
苔の
衣は
濡れ
にけ
ら
し
も

二条院讃岐家集 春部

万八
陸奥の安積の山の
影さへ見ゆる
山の井の
浅くは人を
思はざりしを

古
かけ見ても
なほ
たのまるる
山の井の
にごりそめ
ぬる

大和物語
ちはやぶる
賀茂の
瑞垣
ほりし
山の井
の
浅くは
人を
思はざりしを

万七
我が
うらなく
山の井の
浅きも
人を
天の
下なる

古
山の井の
浅き
心を
思ふ
ものか
は

大和物語
ちはやぶる
賀茂の
瑞垣
ほりし
山の井
の
浅くは
人を
思はざりしを

万七
我が
うらなく
山の井の
浅きも
人を
天の
下なる

支集
昔、
男、
女、
いと
かしこく
思ひ
かはして
あり
けり

支集六 中集
山こえて
われを
尋ねて
来ませる
君
いかに
苔の
衣は
濡れ
にけ
ら
し
も

古
二条院
讃岐
山こえて
われを
尋ねて
来ませる
君
いかに
苔の
衣は
濡れ
にけ
ら
し
も

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

三条太政家藤原実房公
貴之
家
菊の花あまたうゑられけるを
文保二年八月常盤井仙洞より
召とてうつしもてまゐりけるに
菊大納言實教
乙
仰のまゝ紙をもん菊をつゝみ
後宮権按察家百首を
乙
菊のおのおの別なるこゝろを
宣秋門院丹後
山家菊春といふこゝろを
従二位為子
文保百首のそのころ八菊をとりまぜよませ
たまひけるに
中納言為相
菊もちる毛頭をかしき物とて
たゝらを
入道二品親王尊円
まがき山尾上の菊は霜よけの
苫屋ぞ菊の盛なりける
百首のうちにて
等持院贈左大臣

新拾遺和謌集巻第三

夏哥

更衣の心を

文人の袖つき衣うすくて夏さし来ぬる

家ふ前

等持院殿御

暁もさやかでうつる人の衣手も

首夏をよそに世捨うけるる

浅河家

なつも白妙つもる山の羽衣を

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

百その字ゆ　進め田親王

友こもちもそても烏れ　れぬ刑一云の花源ゆ秋

二忌侍親王宇治　五十首和ま

夏衣古ろもおもれてゆく乗

光りも　注皇汗製

雲の古烏通ゆくさ礼野ハあまて乗い拾ふさ友真照

徒人一ら

乗ふね春ゆ古ろもそらいなの

礼山古たもろく掃ゆ

礼二佐為ま

秋後拾遺友　平師氏

友心のもと常ふすゝ

ふくるやもろ舟ふ

拾ちもん

裏のふ乗ふ常の山乃約ゆ

文保百首　尊よそもろ時

春常のこ知りおゆりか行暮

夏歌の中ま　中納言為冬

衣笠内大臣

まれての後恋へも約ま乃日数ま乗のこあまさ礼ぬ

和暦四年内裏菊花　冬の日あさ浦

の九き浦よ冬のう

ま多給ふ　後京極殿

ま純に神常ふあゆ

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

上西門院のうきとき
のんちゃくをおもひ
なく秋院のおやの
しけり

二條院御時
三條院女房
よいのうみ

百首の中に
民部卿為明

照慶門院一条

七十九
七十六通御院 久安六年

久安六年

此の歌と石實

また拾うもの　順徳院御製

暁ぬとおもふそうらやかくきゝ

郭公

山ひこも月なく更の鄙ぢ迄人の目ある

建武二年内裏よりて人と頻をさゝうてくそ

歌うたひけり時有動相とおもふ物とつうさ

つうもる　後深草院少納言

時そうきすてゝ今一こゑ郭公

石清水にて　前大納言為氏

ほとゝきすなく山のそこひの新月の

夏の声よ　安嘉門院大弁

わろきのやうにてかくきゝますをいかゞ

きのやうにつきそへたるのそに一よ

はやう笑源をくめ給ふ日吉社の奇合

おもふ事侍る故

やまたちのふもりぬ時鳥をのうへをさうん

郭公

時そなのふえそうて一よの後

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

里とほき山のさくらもいつしかとおる心を

前内大臣

前内大臣のもとにまかりてかへりまうできて

元仁三年三月廿日

人おほき社のうさ田の苗代

前二条院御製

ふみやたこのとも緒

藤原雅朝朝臣

風よりも花梅を独ゆきけむ

百十 作者未詳

藤原為家朝臣

たつ神のみやとさめて立ぬ

おほ江の月

百首歌たてまつりける時

神かきみてにちらく梅の

梅窓使宝治

あるをりをうめむりし

古

井前内大臣

清原為氏

心のうちをはるかにおもひやるとは

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

光明峯寺入道前
摂政家百首歌
権中納言定家

橋の袖ふく春の山風
よそにのみ聞くらすの
里人もむすぼほれつる
朝霞かな

いかにそよ誰も恋しき橋の香を
おえ百首歌たてまつりし時
古

村雨のなほ降りやらぬ軒のつま
お中納言雅有

たちそへて
垂露もむすぶ袖の香ぞ
時雨相ふむ
平民村

かくそこそ
九条関白
遠保四年百首歌
為親

うれしさの
為教
袖中時雨といふ事を

拾

月みれば千たひ雁ぬる秋の夜を
題しらず
大伴家持
久方の雲井のかりもなきぬべし
我恋ふる心いまだやまねば
柿本人麿
秋山のもみち葉しげみ迷ひぬる
妹を求めむ山道ししらずも
河内
秋風の吹きうら返す葉見れば
いまだ見ぬ人の秋をこひつつ
春日蔵首老
秋萩の枝もとをゝに置く露の
消ぬ間に逢はむよしもがも
大伴家持
秋萩の咲きのさかりを見る時は
百年ながき命なりけり
河内
秋萩の咲きのさかりをうつし植ゑて
見れども飽かぬ花にもあるかな
大伴宿祢家持
秋萩の散りのまがひに呼子鳥
いたくな鳴きそ我恋まさる
大伴宿祢家持
秋萩の散りのまがひを惜しみ
我が思ふ時に雨な降りそね
大伴宿祢家持
秋萩の散りのまがひの過ぎぬれば
形見にならず恋ぞまさりぬる

万葉十六 作者未詳
妹も我も一つなれかも三河なる
うそかやつりの翼の羽の
うつせみの世の人我も一重なる
衣の色の異なるらむ
未の年の人の衣の色の異なるを
嘆きて作る歌

河内
秋萩の咲きのさかりを見れば
思ひ過ぎにし人ぞ偲ばゆ
春日蔵首老
秋萩の咲きのさかりを見る人の
かざしの上に置く露の
消ぬべく我は思ほゆ
大伴家持

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

平忠盛朝臣久しく
海の月毎夕に
おやまとにきこえし月かも明
而そなめりな河
き月山ら来なりそめす
さりらす
きりまろ
文保三年百首
中納言為兼

その一もと入す山乃源
照射哥
水もすま
元弘三年三
業房風
前大納言為世
あり
石そ
二条院
権中納言公雄

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集　400巻』　請求記号 853-166

ガラス使用

元仁のころ秋やをそき等持院殿
元仁三年立后屏風の事ども承りし
夜衣さらさら袖の涼しさをふむもをそ鳴る山の井
夏月をよませ給うし
月乃ゐるこのもとみけよ天の河原萩の花
萩元百首歌たてまつりし時 おなし心
お大納言為世

[illegible]
約束ありし涼しくなる月乃光りやそゆるみの萩
たいらもと 参議平朝臣
寄風萩
夏乃秋八月そおもふ[illegible]
白河殿七百首奉りし夏月似秋
前大納言為家
咽やをそ秋のまくすの門風を林のそとや心ひくそ
題しらす
鳴もさるをたにたえ絶ぬ虫の声かくらすもうき
前参議為継朝臣
いそのかみふるき都や荒ぬらん月乃秋風身にしみそする

[illegible]

寛平法時きさいの宮の歌合の時

琴の琴（菱万）
（琴）

琴乃琴よりこきまぜてうる秋風
（琴）

引すす

山ひこもこたへぬ夕月夜（古）（陌）

後恵法師

ふるさとのよもぎふにも松風の
こゑはかはらぬものにぞありける

和泉式部

百首歌たてまつりける時

藤原行盛朝臣

もろともにおきあかしてし秋の夜の
月をひとりやながめわびなん

進子内親王

大ぬさやあさのゆふてにかけてだに
浪こす宿をしめよ吉野川

お内右衛門

文保百首歌たてまつりける時

後西園寺入道前太政大臣

とりとむる物さへ添はねぐるまやと

新拾遺和歌集巻第四

秋哥上

貞和二年七月七日三首哥めされけるつでに

早涼知秋といふ事を

法皇御製

燈をかゝげてもあへぬ鈴虫の

ま林の心を

特大納言義詮

蟋蟀のそこともわかぬ吹風に

さゆる夜ごとに寒くやそなる

三条内府に侍ける家五十首歌よ

法二位家隆

浅茅原

守とても老の為有

うらぶれてせきあふ

くぬち秋さよく

燈風の吹ぬ日もなく蟋蟀乃なく秋ぞ多くなりける

前元百首哥めされける時初秋

贈従三位為子

露ながら神よりおける浦の色も秋やと初風ぞふく

梅のそめ鳴尾といふ所にて

西行法師

ふるさとも松よなるおの松を

誰かもわけて千年とはしる

大納言経信

おほぬさの浦風ぞ吹秋乃をと

千五百番哥合よ

後鳥羽院御歌

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

[illegible]
葉も[illegible]

万一

[illegible]

秋をさき松のあらしの夕ぐれ神なびやまの初風

初秋の心を　　澤正尹朝臣

初秋風吹くたもとや袖ならん

[illegible]

夏をやめぬ衣をうすき秋の山　万一

初秋の心を　　前中納言匡房

稍ふくる色うき秋の諏田山もさ夢に露やおくらん

いとゞやも露そふ秋の袖の風

二条院讃岐

百首の中一時

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七夕哥　　躬恒

家集五首
久堅のあまの河霧たちわたりけふ
百十　作者未詳
銀河こよひひとりのみ
家集百首
貞和二年百首哥
後醍醐院御製
ふる人のいまもわすれぬ
おなじさ七月吉三首歌講せられけるに
夕まぐれ
お開白九首
秋も猶なほ哉や七夕の

百首哥たてまつりける時七夕

入道二品親王法守

元亨の比ほひ新宮の家にて里合の哥よみ侍りけるに

七夕をよめるうた

貞和二年七月七日三首哥よみ侍りける

七夕

前大納言経氏

織女の梢よりやすらふ雲の袖

七夕地儀をいのるうた

院御製

天河うつりゆく月

百首哥たてまつりける時七夕

前大納言忠重

かさねくもうつろふ秋の夜

題しらず

源兼氏朝臣

いづのまにおもふ心を

古

中務卿宗尊親王

天河やすの小舟のあまたこぎ

後二條院御製

秋ふかみ

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

元永三年立后屏風ノ七夕

前参議経宣

七夕ノ雲ノ衣ノさゝめ

秋歌ノ中ニ

七夕ノ雲ノ衣のさゝめ

織女のあかぬ別ノ久さに

千文百番ノ合ノ

七夕ノ雲ノ衣のさゝめ

皇太后宮大夫俊成女

風吹ヲ待ノみさほノ苅萱も

夕ハ露ノ

秋ノ歌

前参議公長卿

夕されハおのへの風ノみにしみて

鳴ヲ聞ク

雲居寺瞻西上人ノ

補仁歌ヲ家甲斐

ゆくへなきあまの苅萱ノ露吹むすぶ秋ノ風

伏見院ノ御歌二位ノ

それ更ニ翔ノ露ヨ宇治ノ柴ノ庵ノ

面ヲ御ラン

月花ノ院

後拾遺秋上
光明峯寺入道右大将家ノ
ろくもそうこくのころ
秋ノ御歌

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

秋の野に芽子咲きたるを

法皇御製

秋の野に咲きたる花をたをらずて

ただに千歳を我は見つべし

秋乃花波

のをそくみえけむいつらもて

今まうてこんとやくそく人

古

中務の卿の親王の家の

歌合の歌

秋の野の草のたもとか花すすき

穂に出でて招く袖と見ゆらん

続人丸

うつりゆくうつろふもの万下ロ

うつりゆくいろいろの草の花の露

うつきこうやこの六

朗詠集

建武二年内裏千首の時

秋萩

秋の野の露をわけつつ神な月

文保百首の時

法市定

秋の野に露おきそへてをみなへし

さきいづるかも

人麿

万十 作者未詳

六

娘子らが挿頭の萩に置く露を

万十 作者未詳

六

朝な朝な玉と見るまで

人丸集 家持集

万葉六帖 并家集 元載

ふりつめる雪かとのみぞ

中納言家持

秋の野の朝けの色もうつろへば

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

百首歌奉りし時

神垣や三室の榊葉
月ぬ(五古)春とうつる事をそ

おほ江の朝臣

杉たてる門の苔路踏みわけて
誰も二年を待侘ぬ宿

御製

かり衣そのまゝ枯の野辺なれや
虫鳥ならぬ人の声せず

おほ江の朝臣

杉村の中に

里太后文章傳

村雲ハ心もあのかぬれつゝ苔の袖もぬるゝ

貫之

ぬれてそあやめ人や(あとゝ家)

六 家

郎花匂ひを神のうつしてそ

坊河院御時百首奉

墓後

何ゝ野のかたらふ秋風

二條后御歌

女郎花よれる露をも吹むすぶ

たにしらす

法眼元輔

女郎花のなをもそ(家集不載)

後拾遺集上

雑宣

おほ江

杉たてる門の苔路踏みわけて
誰も二年を待侘ぬ宿

御製

かり衣そのまゝ枯の野辺なれや
虫鳥ならぬ人の声せず

おほ江の朝臣

杉村の中に

里太后文章傳

村雲ハ心もあのかぬれつゝ苔の袖もぬるゝ

貫之

ぬれてそあやめ人や(あとゝ家)

六 家

郎花匂ひを神のうつしてそ

坊河院御時百首奉

墓後

何ゝ野のかたらふ秋風

二條后御歌

女郎花よれる露をも吹むすぶ

たにしらす

法眼元輔

女郎花のなをもそ(家集不載)

後拾遺集上

雑宣

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

大さうみやうじんのうちをうけとる

風雨ちくさの雛の祝ひまつり

伏見院より歌百首奉らせ給ふ

事を須佐乃

九条左大臣

日蓮の聖人吹きうるおほ風をはらふ玄の上の

新勅撰

おほ〳〵を

義のうへの袖とかりてやや弁ふ乃

古

白河院を初奉りまつり時聖草寂蓼

とある事を

源親房卿家

うちなびくこの玉藻のみ雪かな浜

たつうらを

お中納言定家

法印實快

暁雨上人うたを

浴恩院中宮上総

おほ〳〵を林の梢うちなびく浪

雛祝ふ事を

伏見院御製

高の雛乃もやうをまねびつゝ

為あはれ乃細工とそ見れ

太宰大弐重

卿世親王

権中納言家経

梅壷女御

上西門院兵衛

関白前太政大臣

惟宗光吉朝臣

参議等

文保百首 寄月恋

百寺の念仏に

拾遺雑春

元輔集云極楽寺と云寺に

最勝王経云妙幢菩薩於夢中見大金鼓

○按ずるに此の寺は

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

和元百首奉りける時

前大納言為世

おもひかね袖のみぬれてわかの浦に
なみたかけたる秋の夜の月

従二位為藤

寄山述懐

老の波かきわけくれば浦ちかき
こしの白根に雪ぞつもれる

前参議雅有

今よりは秋風ふかせ松虫の
声よわるまで月をみるべく

前大納言為世

弘安百首奉りける時

前参議雅有

今よりは秋風ふかせ松虫の
声よわるまで月をみるべく

前大納言為世

嘉元二年内裏にて紅葉を
よめる

従二位為藤

前後撰雑上
今よりは紅葉ちらすな神の
ゆるしたまへる山ぞと

月前と人々よめるに

前大納言

おぬしたに吹そふ風の今もなほ
百首奉れる中に月前秋を

前大納言

秋風に袖をかさねし夕べより
文保百首奉りける時

前大納言為世

秋毎のよもすがらとは詠めども
嘉元百首奉りける時月

中納言為藤

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寄源百首奉山月

源入道前太政

春くれてかすめる山をうちわたり
　月にぞ今日も明かしつるかな

百首奉時月

久堅のそらもる雲のおりうすく
　月さえわたる夜半の秋風

題不知

名にしおふ今朝の朝霧はれやらで
　月のさやけき山の端もなし

前大納言俊光女

ゆくへなき里の名残もへだてなく
　月をぞ分けし山の端の雲

正三位知家

あけぬとて帰る山路の木の間より
　なほ残りける月の影かな

二条院春の月

西行法師

吉野山こぞの枝折の道かへて
　まだ見ぬ方の花を尋ねむ

建礼門院右京大夫

ながめやる袖のなみだの露ながら
　月をそへたる秋の夜の空

風雅和中
掌侍殖松歌
ふるさとの荒れたる軒の月やどる
　ひとりながめぬ秋の夜ぞなき

大納言為兼卿

あはれまた幾夜ながめて過ぎぬらん
　人まつ山の峰の松風

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

大井河行幸和歌

大井河ふるきみゆきの月影を
なかれてみるそ
なかれける

左衛門督実

寛元百首奉りし時

権中納言公雄

雲のうへ誰しめもせぬ高嶺より
遠長二年八月十五夜庭上翫月
いづるかたを詠せられるにつかまつりける
山路入遠方
嵐の月むら拳てもはるる名の
陸奥掾源信実
遠里乃そとそ池水のにこりみまねかの
古
雁月をうつす

新拾遺和歌集巻第五

秋歌下

詠百首和歌

後嵯峨院御製

秋ふかき庭の浅茅に風過て月にみだるる虫の声々

後恵法師

秋ふけて百世よりぬる露の上に又玉ぼこの道ぞかなしき

為道朝臣

吹とふく風のしたにもかれ果ぬ秋の名残は虫の音にこそ

伏見院御製

秋風の吹ぬる後の夕暮に又いつしかと待る月哉

建仁二年石清水へ詣侍りける時

前中納言定家

あすよりは忘れ草をもつむべきに猶恋しかるわかれ成けり

秋の末に

太宰大弐重家

かりそめの露のうきよの程もあらじ今はの秋の名残なりけり

前参議家親

みだれても幾世かへぬる露の上に又玉ぼこの道ぞかなしき

入道二品親王家百首歌よみ侍りける

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

源頼康

後撰友
[illegible]

家十五首歌 前大納言為
[illegible]
[illegible]
[illegible]

文保三年百首歌 中納言實任
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

元弘二年九月十三夜 侍従
[illegible]

[illegible]

[illegible]

後京極攝政前太政大臣

名よそる紀利のなぐさも夜さえて
水上秋月と云事を

池水のうつろふ影もすみまさる
遠長えくもれる月十三夜
つる事をつかうまつりけり

二条太皇太后宮肥後

おく山の松のそよぎも聞ゆる
風さそふ夜のわたり九源さ
にぬらん

源重長朝臣

忠見

白妙の雪の花も月さえて氷をしける
遠仁三年仙洞十三
首会に河月似氷と
事を

後嵯峨院御製

とれも文集に不審なる詩句
題にて

法印浄弁

松そよぐ門田の面乃秋風に
露ふりしきて月ぞ三輪の山もと

女房

入通二年歌合に芙蓉露重
露ふりしきる秋田の庵よ芙蓉
入通二年歌合の時一首
詠ませ給うける

法眼行經

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

いそうもえんの月け
郭公
きれなくも私るるかな山ぶきの黄金の色の月の雨
通泉
雨ぬくさきのうんと紅葉の下風も雫をうつし
活原源養之
おく人絶て軒端家ゝ
真昭法師
月影のさやくもるる高園の尾上の雲明方の
法性寺入道前関白太政大臣
ようも世々ろよめる清輔朝臣

秋歌
海ぬ月を
ゆみ入ゝ
雁渡る月方へ雨もあり
上臈月ぞまれ
清のうへうまる月いれ
中納言為房
秋ぬ入てぬ月ちよする鳥ぬ雨
たいらも
法皇御製
秋の夜をおそしとあれや明ぬ

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

春日社寄合之時月と云事をこのそ仕うまつ

後鳥羽院御製

あまの山ふもとに吹くる風のおとのみにあらす

きりうす

寂蓮法師

おとにきくたかしの浦のそこ波のかへるかたにや

月をやとすらん

遠島三首 保元

遠島三年冬歌十首寄会よ

大納言家

月ふくるまくらの夢ぬ松風のおとにそ秋の

更行

正三位知家

月暁のまくら山みねのかたんく夕日くもれる

秋の風寄虫

後鳥羽院御製

秋風やあら世の野辺の虫の声

露百首寄草よりうる時

後鳥羽院御製

うらふかきのうもれ葉ふるさとに秋をそしるき

鹿を

そうき置くのひき田ほのくらむまてなくやこふかん

建長二年冬殿上歌合よ

後法性寺関白御製

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

秋の野の尾花のもとに鹿も今八声ばかりの夜は
新元用裏 前関白
秋ふかみ
ひとりとぢゆく草の戸の
月かげの入野の露にうちまじり
枕敲消いるばかり
傳せられ前右大臣
夢とだに
なほ頼まれぬ
百首哥たてまつりし時鹿
嵩山
うねくまも心ひとつにすみの月
元亨三年九月十三夜 関白左大臣
傳せられ前右大臣
小倉山
遠長二年八月十五夜 中納言為家

万八
ふく風の
ふく風の
ふくかぜ

万

不字

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

一條事とかうまつりけり

古 ふるさとのあしたゆふべのけぶりにも
をしからぬ身はあはれなりけり

弘長元年百首哥たてまつりける時鹿

常磐井入道太政大臣

さをしかのなくくちぶえのそれかとも
聞えぬ程の秋風ぞふく

題しらず

藤原為家朝臣

鹿の鳴くをきゝて

前大納言為氏

秋ふかみ山のかひなる夕霧の
たえまにしかの声ぞきこゆる

承保二年九月殿上の哥合

前中納言匡房

山里は雪ふりつみて人もかよはぬに
猶ふみわけてとふ物は鹿の音ばかりなり

題しらず

源家清

ひとりすむ秋をしる人なきやどに
なくよりほかの音ずれもせよ

西園寺関白

常盤井入道

山里の雪の朝の鹿の音をきゝわたるかな

小野小町

家 妻こふる涙の先に立ぬれば
ふもとにもりてつつる哉
袖さへ紅葉する秋の

入道二品親王尊

さを鹿の我とはなしになくなれば
誰妻ごひて秋萬葉

増基法師

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

高師山 隆之

高師山や松乃まつ吹嵐の分てもかなしく

四条大納言公任の許合子の

廉資王母

文よそに林も鹿の啼ものかハ花乃盛りとも雲ハ来

野鹿とハるまを 前京職雅家朝臣

名よめてく妻やこふらん女郎花乃

従二位兼

さ牡鹿の角の研出てそ立

お春殿御臨家歌合よ

法橋能誉

百首歌奉りし時

鹿の音乃吹くるまゝにおのゝ立なん

家集不載

二条院讃岐

秋さむみ妻やこふらん呉竹の山もとかけて鹿そ鳴なる

従三位為現

秋霧乃立田乃山乃もみち葉ハ

弘安元年百首歌よ夜鹿

前大納言為氏

夕日さす田面のいなハ打なひき山風寒し鹿の声々

百首の内秋歌

前園院御製

ゆふされハ田面乃稲葉おとつれて

百そ乃内秋歌

前権中納言

白鳥のあをねはるの
きらつゝつゝつまそよ
時月しろと
四元和小大和と

中園入道前会議左大
文保二年一百首歌奉りける時
雪中網言之雄
ゆきそふる山本すゝく雪ふかみ
久喜百そ今
きりくとそのそれおそ
永仁元年八月十
めつけふ秋雪を
枯ふくなる秋のさり
大蔵卿隆博
順徳院御製
浦芦やこゝハ葦屋の
宝の称ハ浦芦の霧
きけりやう枯はりわさら
文保百首歌奉りける時
枕ふるさとの雪の
中納言為

題しらず　信明朝臣

家 約人はいたつもあるものなれどさこそ思ふ物たのの
玉葉集四巳上
秋ふかき色も映ろふ今よりや延喜御製

家 雲ゐてる月はさやけき秋の夜の
中納言家持
鳴きてとむる初雁の声
後九条前内大臣
後 雲ゐてる月はさやけき秋の夜の
ものとものとものとものと

月前述懐といふ事を

源人不知

家五十首奉　弾正尹邦省親王

まさきかづら朽ちもはてぬ君が代を
寛和元年八月十日殿上にて
三の会せさ郎拍子
秋くれば雲もや物をうたふらん　範兼
秋くれば雲も井まいるあを

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

名所百首 今年

水莖の岡の葛葉を吹かへしたいらす

序 金小雲井 えれなる

あてそへ弁よりて

陸奥 相模

つもるもみのうもれしまこぬ人のひ

寂蓮法師

伏見院御製

題しらず

紀友則

初雪のふりはつるよりかきくもり

坂上是則

いく千里 ゆくえも

平政村朝臣

はつ雪の別ハふれてあをれるよく初雪の

平義政

天のこころ

入取雪序

西行法師

為れよかくむつきの心地し
敏達紀
伏見渡井そ今よ往三往都よ
まれや友朋の宴乃ち不つつそみる
百首のめされし時鳥
御製
郭子列とい見そてあをく少
杜鵑比親王家挙首奇よ
山吹のさかりにみされて死ちの約束をも
たつらす
見つ春

文永十二年三
秋敦中古集歌
合 よ人ちめ

あるとをしくは
まけてとめるる

後古て秋ト
人丸
鬼のみてくわし
おもひらひき田中の
井さる秋風そ

秋後古て秋ト
新仁法興王
夕雲のおてくのみ
ほしいてきき恵
ま座を吹くる

為家卿
雄風よみてし越くらう井
百首今年時后
お高談寒名
を山田のそおほりかなる
秋田をよ先る
后三往為信
后るまて東をるれ初雲のおての稲多多
九十四花園 三折五
西本文年九月十三夜後酣酬深みこの言と
卜ぢ時文首平
中納言為教
杜のこ月の東さむよりふくる雲まあらそうつ衣小
権中納言奥行

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

[illegible]人のきぬでもいそぐ月や秋さむの衣うつ

元弘三年九月十三夜三首うちまつそ

よおなう心を

後酔醒深翫

八月九月正長夜
千声万声無止時

やすらはぬ月も九月も長夜の月かあかさむよ衣うつ声

貞和二年百首歌、きぬもる時

中間入道前参議

九月の月を秋毫のあきらかなるうんぬ

元弘三年九月十三夜同裏三首うち月前

おなしこころを

擣衣と云ことを

うつきぬて月もろともの心もあれもうつ衣哉

入道二品親王家百首歌

寄衣述懐

もの思ふ秋のこころをうつ衣

寛治二年花前応製

春のきぬ乃きこゆるまて霞めるかな

正三位行朝

たつあしの衣乃袖衣うちもくゆきあふ秋をまつさめん

文保百首奉

参陪朝覲兼賞花門春

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

六帖
ほのぼのとうらのさへ
つき渡るこゑに
きくよりあけぬ

清水のあたりにて、ある所の歌をさぐりとりて、よめといひければ

貞和二年百首歌 従二条前太政大臣

さ衣たち移えゆうら涼しくすぎにけらしも

当こひしろ雲井まで八月秋の夕風

寶治百首 中書王

もろ人のくまなき月をふく風よりて萩の下葉

伊勢大輔

百年を今日一時萩

閑白前太政大臣

七月のそれかあらぬかのうちに今いむりまで萩のさかり

昔の人はまだくをうへられけるを

延喜十八年女四の宮歌合

萩

もまきをう萩とかをもむ七月のつゆ

六

業遠朝臣の浮時萩遠き事をつく

もろもろ

大納言右大臣

いくうつりせにのれよあひもみん萩の

萩

賀之

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

入乃二条歌を柱の
柿もみち
ゆふへ(之)ふく世まて匂へ菊の花
長暦二年九月歌合
六十の内 治安三年
匂へとて給さり(里)し物ゆへの
菊の花へ(之)は(者)旬(きま)
寛平御時菊合
左勝
みち人こゆ
菊の露
さくらも
人丸

万十 紀ありつ
六
ありそのうら乃
万十 紀ありつ
波乃りの
一八 市原王
柿もみちてを(おる)ちの時雨のあめ(ふる)
家百首 寄
洞院摂政前左大臣
初時雨ふるやいつ(の)この山ふもと乃
紅葉ちるらし
永元百首歌合
左
初時雨ふるや片岡のもりの
紅葉ちるらし
大弐卿長経

入道左大臣家
弘安元年百首歌奉
二条院讃岐
お開口先大臣を
百首の

家 ふるさとの三笠の山の
六 くれ竹の隈もおちず
支まず九雑一 照る月
家 もる山もありのすさびも
家 永保三年大井の
七十一 白河 義保三
水のおもをうつすもたのしき
小一條院大井のおうち
水にうつるを
大納言 ※

万葉并人丸集
所見六帖
朗詠
ほのぼのとあかしの
おつるうみ
ふねをしぞ
おもふ

杜あくるうら川の
紅葉を
家 大中臣頼基
水底よりけのこみのうれ葉
杜の北中
万
山もめ乃ゆのまにうめ
家 もる月のみやまの
信
今
かつらおろしの杜乃河面
家 偖

旧暦くもりつゝ秋の空
紅葉を送れる事を

中納言定頼

かりつゝも君がこゝろは
秋の空つゝも白雲の

前大納言公任

旧そでのよもぎふ山里乃
陽成院御時奉合

読人しらず

年ごとにもみぢ葉流る神なびの
三室の山に時雨ふるらし

新古今集 巻第五 秋歌下
四中将実方朝臣
七月ばかり白河の殿に
うるはしうありける女の一条
みるごとにうつろふ
人
うつろふをそこととやは
しるべきの
紅葉も人も昔ならぬ
世や

刑部卿範兼

秋の色を
あをもれぬ秋の神垣
百首哥奉りし時九月盡

内大臣

紅葉する秋乃ふもとや神なびの
三室の山を染て行らん

福家より侍りける比人に長月の晦の日遣
うらて海邊の月夜の心を
よめと侍りければ

平経正朝臣

八月ばかりまでとまりて秋の原
波の上より秋を送るは
大納言通具

国立国会図書館　　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用